

いろは



日本と台湾との架け橋
法交協
Interchange Association Japan (IAJ)

住所：台北市慶城街28号 通泰商業大樓
TEL：02-2713-8000 FAX：02-2713-0705
HP：http://www.koryu.or.jp/nihongo/（日本語センター）

28

2009年7月20日発行

発行：財団法人交流協会日本語センター 編集：岩崎良美・謝秀玉 印刷：加斌有限公司

台湾の普通高校における第二外国語としての日本語教育の取り組み

岩崎良美（台北事務所日本語専門家）

「いろは」19号(2005年6月20日発行)に、「普通高校における第二外国語としての日本語教育の歩み」と題した記事がある。そこには、普通高校のカリキュラムに第二外国語が導入されるまでの経緯や、「推動高級中学第二外国語教育五年計画」¹について具体的な実施内容などが報告されている。この五年計画も2期目の最終年を迎えた今、台湾の普通高校における第二外国語教育を取り巻く現状はどのように変化しているのだろうか、その最新状況を述べる。

普通高校における第二外国語教育の現状

教育部中等教育司²の統計によると、97学年度(2008-2009年)普通高校における第二外国語の授業は197校、863クラスで実施されており、29,377名の学生が第二外国語を学んでいる³。正確な学校数が最初に発表された90学年度(2001-2002年)では第二外国語を正式に授業に取り入れる学校は99校で、以後順調に数を伸ばしているといつて良い。また、開始当初の4ヶ国語(日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語)に、韓国語、ラテン語、ロシア語が加わり言語の種類も多様化している。その中で、最も学習者数が多いのが日本語である。表1は過去5年間における各国語の実施校数・クラス数・学習者数を表している。日本語を選択する学生は全体の79%を占め、依然として圧倒的に多いことがわかる。

高校生の第二外国語学習を後押しする新たな試み

教育部が中等教育における第二外国語教育を重視し、

2期の五年計画を実施したことで、多くの高校生が英語以外の外国語を学習する機会が確実に増えた。しかし、貴重な授業時間を割き、せっかく学んだ第二外国語の成果を次の教育段階に繋げる支援が不十分であった。早い段階で身につけた第二外国語を高校卒業と共に封印してしまうのではなく、高等教育機関でも継続して学習しやすい環境を整えるため、昨年11月よりはじまったのが、「高中生預習大學第二外国語課程専門班」である。中等教育司と、教育機関(普通高校及び大学)とその教員で構成された委員会等の協力により始められたこの制度により、普通高校の学生が週末を利用して大学教師による第二外国語の授業を履修することができるようになった⁵。初年度である97学年度(1学期9月13日～1月11日、2学期2月14日～6月27日)はフランス語(3)、ドイツ語(3)、スペイン語(1)、日本語(5)の計12クラスが開講された。授業回数は原則として18回、毎週土曜日の午前8時から12時までの4時間行われ、中間・期末テストも実施される。会場は高校の教室、教師は大学教師を、それぞれ委員会に属する教育機関が提供している。日本語クラスは表2の通りで148名の学生が履修した。実際にどのように授業が進められているのか、台北市の中山女高で行われた授業を訪れた。

表2 97学年度「高中生預習大學第二外国語課程専門班」実施状況(日本語)

会場校	授業担当大学	人数(人)
台北市立中山女高(A班)	台湾大学	38
台北市立中山女高(B班)	台湾大学	37
台北市立景美女中(A班)	政治大学	30
台北市立景美女中(B班)	政治大学	31
国立台中女中	静宜大学	12

表1 普通高校における第二外国語学習者数の推移⁴

学年度	言語	日本語			フランス語			ドイツ語			スペイン語			韓国語			ラテン語			ロシア語			総計		
		校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数	校数	クラス数	学習者数			
93学年度	第1学期	126	456	16,511	54	106	3,124	23	30	835	18	26	824	0	0	0	0	0	0	0	0	0	111	571	18,884
	第2学期	132	519	16,774	52	106	2,829	14	18	398	15	21	536	2	2	39	0	0	0	0	0	0	133	666	20,576
94学年度	第1学期	138	567	19,877	50	113	3,274	16	27	765	17	22	581	2	2	42	0	0	0	0	0	0	139	731	24,539
	第2学期	136	522	17,227	50	116	3,167	17	29	827	19	27	749	4	6	162	1	1	14	1	23	137	702	22,169	
95学年度	第1学期	159	603	20,523	55	114	3,552	24	39	1,133	21	26	410	9	10	304	2	2	42	1	1	25	159	795	26,289
	第2学期	143	553	17,962	51	117	3,079	19	28	652	17	22	554	5	5	114	1	2	42	1	2	39	145	710	22,447
96学年度	第1学期	179	682	24,233	57	121	3,675	19	29	857	23	30	846	7	9	223	1	1	25	1	2	31	184	873	29,890
	第2学期	181	668	23,292	65	129	3,724	21	32	941	25	34	942	8	10	261	1	1	21	2	3	81	189	876	29,262
97学年度	第1学期	190	638	22,791	62	133	3,954	21	31	923	30	154	1,237	10	12	371	2	20	59	2	3	42	197	863	29,377

中山女高で行われた授業には、台北市及び台北県にある15の普通高校の学生75名の学生が参加した。他校の学生と入り混じり、ペアワークなど活発な教室活動が行われていた。授業を担当するのは、台湾大学で教鞭を取っている彭誼芝先生(A班担当)と李欣倫先生(B班担当)の2名である。先生方に高校生の印象について伺ってみると、皆、元気があってとてもまじめに学習に取り組んでいるとのこと。また、大学の授業と比べて難しい点や特に気をつけている点については、元々日本や日本語に対する学習意欲の高い学生ばかりであるが、継続して日本語を勉強してもらえよう、知識詰め込み型の授業ではなく、教科書に載っていない情報や高校生が関心を持ちそうな題材を選ぶように注意しているということであった。彭先生に授業で実際に使用した副教材を見せていただいたが、バラエティに富んでおり、どれも学生の期待に応えようとする先生の熱意を感じるものであった。また、李先生は授業の合間に、自分が日本で体験したこと、日本語学習を通して感じたことを学生さんに伝える工夫をしており、瞬時に学生さんから質問が出るなど、言語学習を通じたコミュニケーションを大切にすることが印象的であった。



中山女高での日本語授業風景

高校生の日本語学習に対する想い

学期終了後、受講生はテストの成績や出席率に基づいた成績評価を受ける。そして合格者は授業を担当した大学から4単位の成績証明書が発給される。この単位は大学入学後の履修単位として(全単位もしくは一部が)認められたり、各大学が独自で行う推薦入試選考の際、加点の参考とされるなどの特典を受けられる。この「高中生預習大学第二外国語課程専門班」は、教育部や高校側にとっては、学生に第二外国語を学習する機会を増やし、国際感覚を養う助けとなる。そして、学生たちにとっては、自分の好きな外国語を高校の授業以外で受けられるだけでなく、推薦入試を受けるのに有利に働いたり、進学後の単位も先取りする事ができるなどのメリットがある。更に授業を担当する大学にとっても基礎的な語学能力を備えた優秀な学生を獲得することに繋がる可能性があるというわけだ。実際に授業に参加していた高校生(A班38名)に授業に関して記述式のアンケートを行った。その結果を以下にまとめる。

1. どうしてこの授業に参加しましたか。

この授業に参加することを自分で決めた学生がほとんどであった。推薦入試や進学後の単位取得などの付加的な要素よりも純粋に機会があればもっと勉強したいとの思いが強いようである。

2. 第二外国語の中で日本語を選んだ理由は何ですか。

まず、日本語は他の言語に比べて身近な存在であり、親しみを感じる言語であるという意見が多かった。またそのような言語を通訳や翻訳に頼らずとも自分の力でもっと理解できるようになりたいと考える学生も多かった。

3. 高校の授業と何か違うところはありますか。

テストや成績に対するプレッシャーを受けることがなく、リラックスした状態で勉強できる、自由な雰囲気であるいろいろな事柄を学ぶことができる、など精神面に関する意見が多かった。この授業は「義務」ではなく、自分で好んで勉強に来たので楽しく感じると率直な感想が多かった。

4. 高校を卒業した後も日本語の勉強を続けたいですか。

また将来日本に留学したいですか。

日本や日本語に親しみを感じ、学習にも積極的な学生だけに、日本語を専攻したいと考える学生も多いと予想したが、大学進学後、日本語学科を進学先として考える学生は以外に少ないことがわかった。日本語を話せるようになりたい、理解したいとは思っているが、あくまでも1つの道具としてであり、趣味として楽しんで勉強を続けたいという高校生の本音が見える結果であった。しかしながら、ほとんどの学生が機会があれば留学してみたいと答えているのも特徴的である。

5. 「日本」と聞いて何を思い浮かべますか。

この問いに関しては、それぞれの個性が出る様々な回答が書かれた。アニメのキャラクターやアイドルなど人や物の名前、地名を書く学生がほとんどで、メディアの影響が強いことがわかる。逆に日本や日本人に対する実体験に基づく印象を答えた学生はあまり見られず、高校生にとって日本語を通じた文化交流が必要であることを窺い知る結果となった。

今後の課題

「五年計画」で第二外国語の学習をスタートさせた高校生が、「高中生預習大学第二外国語課程専門班」により、更に多くの学習機会を享受することができるようになり、学生の第二外国語に対する意識や実際の語学能力は向上している。一定の能力を身につけた学生が個々のレベルに合った学習を円滑に進められるよう、高等教育機関側の更なる柔軟な対応が第二外国語学習の成果をより大きくする鍵になると思われる。

¹第1期は1999年7月から2004年12月まで実施、現在「推動高級中學第二外國語教育第二期五年計畫」(2005年1月から2009年12月まで)が行われている。

²主に中等教育機関における教育政策を行う他、教師の育成(教職課程)や有職者(現役教師)への再教育などを請け負う機関。

³台湾の普通高校は公立私立を併せて321校であるから、61%の高校で第二外国語の授業が実施されていることになる。

⁴教育部中等教育司「88學年度至97學年度高級中學開設第二外國語課程彙整表」をもとに作成。

【URL】http://www.edu.tw/files/site_content/B0037/88-97學年度第二外國語開班數及語種統計980616.doc

⁵以下の3つのうちいずれかに該当すれば申請資格が得られる。

1. 普通高校において4単位72時間の第二外国語を履修している。
2. これまでに第二外国語が話される地域に住んだことがある。
3. 第二外国語の検定試験に合格している。

「相手と状況にあわせた会話能力の養成」

宮谷敦美氏（愛知県立大学准教授）

「会話ができる」とは

「話す」には、講義やスピーチのように一人の話し手が話し続けるものと、二人以上で交替しながら話すもの（＝会話）があります。スピーチのほうが会話より難しいイメージがありますが、会話は、スピーチのように自分の言いたいことを並べれば成立するわけではありません。「相手の話を聞いたことをもとにして、自分が次に話すことを考え、そして相手にまた話を渡す」ことを、相手と協力的に行ってはじめて成り立つのです。

会話クラスでモデル会話を暗記し、モデル会話と同じような展開の会話でロールプレイ練習をしても、教室外で実際に話す場面になると、何を言ったらいいか分からない、相手が想定外のことを言って話を続けられないという学習者の話をよく聞きます。パターン練習でなんとなく話せるようになった気分になっても、実際には役に立っていません。

本当に「会話ができる」ようになるためには、文型に当てはめて正しい文を作る練習や、ある会話の典型的な流れ（＝談話構造）を学び、その流れに沿って話す練習をするだけでは不十分で、相手の発話にあわせて話す練習が必要なのです。

「相手の発話にあわせて話す」

相手の発話にあわせて話すためには、まず、相手の話を聞いて理解する必要があります。日本語の授業で「聞く練習」というと、依頼の会話を聞いて「何を頼んだか」や「依頼を受けたかどうか」といった、内容を聞き取るタスクが主流です。しかし、実際の会話では、「何を、どこで、どうやって」といった内容の聞き取りと同時に、話し手の感情（感謝しているのか、当たり前だと思っているのか、等）や意図（無理強いしてでも頼みたいのか、断られてもいいのか、等）を理解しなければ、相手の発話にあわせて次の発話をつなげることができません。例えば、「ご無理を言いますが、車、明日まで貸していただくわけにはいかないでしょうか」と言われた場合に、話し手が頼むことに対して非常に申し訳なく思っていると聞き手が理解できれば、返事は、「いいですよ」なのか、それとも、相手の心的負担を減らすために「今、使っていないので、気にしないでください」のほうが適切なかを考えることができます。相手の感情や意図を無視した発話をする、相手の人間関係に亀裂が入るかもしれません。

このように、会話能力を高めるためには、実質的な会話の内容だけでなく、自分の発話をコントロールするのに必要な、話し手の感情や意図を聞いて理解できるようになるための練習が不可欠です。

「相手と状況にあわせて話す」

「相手と状況にあわせて話す」というと、一般的には、話す相手によって待遇表現を使い分ける練習が重視されます。

実際の会話を見てみると、会社の上司（＝目上の人）との会話ではいつも丁寧な表現を使っているわけではなく、プライベートな場面では、フォーマリティーの高い表現はそれほど要求されません。人間関係だけでなく、どんな場面で何について話すかによって、適切な表現は異なります。日本語の授業では、友だちに対してはカジュアルな依頼表現「ーてくれる？」を用い、目上の人に対しては、丁寧な表現「ーていただけませんか」を用いるというように、二項対立的に教えることが多いで

すが、相手の人間関係と表現形だけを結びつけるのではなく、同じ人間関係であっても、さまざまな状況やトピックにおいて、表現の使い分けがあることを学習者が理解できることが重要です。さらに、表現の使い分けだけでなく、さまざまな状況やトピックにおいて、話さなければならない内容と、その順番（話の進め方）、配慮のしかたについても異なるということ、学習者は理解しなければなりません。

例えば、仲のよい友人に「消しゴムを借りる」場合と「1万円を借りる」場合を考えてみましょう。「消しゴムを借りる」場合は、「悪いけど」のような前置き表現を述べたり、「今日消しゴムを忘れたので」のような借りる理由を述べることはまずありません。一方、「1万円を借りる」場合は、「申し訳ないんだけど」と相手への配慮を示したり「次の給料日には必ず返すから」と返す見込みを述べたりします。

会話の授業では、典型的な談話構造の会話練習をするだけでなく、さまざまな相手と状況を設定したタスクで、学習者が普段から「言うべきこと」と「言う必要がないこと」とその順序について、考える練習を積むことが重要です。

このような「相手と状況にあわせて話す」練習は、ある一定のレベルに達してから始めるものではありません。もちろん、初級段階では使える表現や語彙は限られますが、文型やパターン会話練習だけでなく、聞き取り練習の際に、話し手の気持ちや意図に注目し、「こんな場合どう言ったらよいか」を考えさせることで、少しずつ「自分なりの言い方」を身につけさせることができるのではないのでしょうか。

教室活動における工夫

相手と状況にあわせた会話能力を養成するためには、「聞く」と「話す」を別々に扱うのではなく、「聞いて働きかける」という観点から、教室活動をもう一度見直す必要があります。

聴解クラスでは、相手の意図や感情を理解するために、市販の聴解教材などを利用し、話し手の気持ちや聞き手に期待していること、自分だったらどのようにするかを考えさせる練習を取り入れることが可能です。また、教科書のモデル会話の音声を利用して、会話を途中まで聞き、その後の会話を学習者に考えさせるという方法もあります。

会話クラスでロールプレイをする場合は、ロールプレイの前に、これまでの自分の経験について話し合い、何に気をつけて話せばいいか（話の始め方や終わり方、言ったほうがいい内容と言わなくてもいい内容、相手に働きかける場合、相手の負荷はどの程度か、等）学習者に気をつけるべき点を考えさせます。また、フィードバックの際に、タスクが達成できていたかどうかだけでなく、話の内容と順序、聞き手にどんな印象を与えていたか、等についても、学習者自身が振り返る時間を持つようにします。

このような発話を観察する練習を積むことによって、適切な発話を意識するようになり、相手と状況にあわせて話す能力を養成することができると考えます。

国際交流基金(2007)『国際交流基金日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』ひつじ書房

国立国語研究所(2006)『言語行動における「配慮」の諸相』くろしお出版

ボイクマン総子他(2006)『聞いて覚える話し方日本語生中級初級編1教室活動のヒント&タスク』くろしお出版

ボイクマン総子他(2007)『聞いて覚える話し方日本語生中級初級編2教室活動のヒント&タスク』くろしお出版

第3回 「インタビュー」

張文芳氏（友愛グループ）

今号のインタビューは、日本語サークル「友愛グループ」で幹事を務めていらっしゃる張文芳氏に、グループの具体的な活動や自らの日本語との関わり方などについてお話を伺いました。



Q：「友愛グループ」設立の経緯や趣旨などについて教えてください。

台湾で正しい日本語を理解し、使いこなせる人材が減少しつつある現状を憂い、陳絢暉氏らの呼びかけにより、台湾に住む日本語に関心のある方々と共に日本語を勉強する「友愛日本語倶楽部」が1992年10月に創められました。その後現在の「友愛グループ」に名を改めました。「友愛会」の呼称を使う方もいらっしゃいます。正しい日本語、美しい日本語を話すこと、そしてその「正しい日本語」を後世に受け継いでもらうことをグループの趣旨とし、様々な活動を行っております。2009年2月現在で143名の会員（うち日本人は33名）がおります。会員の多くはいわゆる日本語世代の方で、平均年齢は74歳（最年長91歳、最年少38歳）となっています。

Q：具体的な活動内容についてお聞かせください。

主な活動としては毎月第3土曜日に行われる「例会」があります。ここでは、日本人会員による名文朗読と、会員の皆様による普段の生活で感じたこと、出来事などを題材にした日本語によるスピーチのほか、日本語の語彙や正しい使い方などをクイズ形式で学びます（毎回2名の講師が担当）。日本語を毎日のように使用し、慣れ親しんでいても、日本語に関して知らないことはまだまだたくさんあり、毎回新しい発見があります。

その他、年に1回、例会で発表した文章や会員によるエッセーを綴った会誌『友愛』を発行しています。更には会員の皆さんで旅行に出かけることもあります。昨年10月には台南、高雄の他、日本人水利技師である鳥居信平氏ゆかりの地である屏東を訪れたりしました。

Q：台湾には他にも日本語サークルが存在しますが、「友愛グループ」の特徴的な点についてもう少しお聞かせください。

日本語を通じて世の中の動きをキャッチし、それらを楽しむというのが、このグループのモットーとするところ



例会の様子



ペンを片手に熱心に問題を解く皆さん

です。ですから、日本において雑誌等で台湾に関する情報が出されたら、それらを入手し、グループの皆さんに紹介しています。

また、新しい動きだけでなく、台湾の到るところで見かける「スリッパ」や「マツサーズ」に代表されるような、日本語の表記や翻訳の誤りにも敏感です。表記や翻訳の誤りを集めて勉強の材料としたり、空港や駅の地下街など多くの方の目に触れるものなどは、是正をお願いしたこともあります。これも当グループの役割の1つと考えています。

Q：自らもビジネス通訳者としてご活躍されていますが、日本語能力を磨くためにどんなことに気がつかっていますか。

何か特別の参考書などを利用するのではなく、日頃の生活で目にする手紙、文章、NHKの番組など見て、自分の知らない言い回しなどに注意を払います。日常の何気ない生活から初めて見聞きした言葉、また使い方を誤解していた言葉などに気づくこと、そしてそれらを試して使ってみることで、自分の頭の中にある「辞書」が加筆・修正されます。限られた時間や環境の中で語学力を保つには、このような意識が大切ではないでしょうか。

Q：台湾に数多くいる日本語学習者の皆さんに激励の言葉をおねがいします。

台湾の方は引っ込み思案の方が多くのように思います。語学を学ぶのに恥かしがるのが弊害になることが大いにあります。皆さんは台湾人なんですから外国語である日本語が少々おかしくても恥かしがる必要はありません。我々の月例会でも会員の皆さんにスピーチをすることをお勧めしています。3分程度の短いもので構いません。学校の中でも簡単なスピーチで声を出して読むといった機会を増やしてはどうでしょうか。台湾にいたら日本人と話す機会も少ないと思っはいませんか。チャンスは自分で求めるものです。いろいろな場所に積極的に顔を出してください。また、昔とは違い、コンピュータやインターネットなど有効なツールはたくさんあります。これらをうまく利用しない手はないですよ。

Q：今後の会の方向性などについてお考えがあればお聞かせください。

例会の他に、各自興味のある人が分会を作ってそれぞれ研究をしてもらうということも考えています。既に日本から先生を招いて座談会を開催するなど少人数の活動を行っている例もありますが、今後はこのような動きが更に活発化するといいなと思っています。またこのような活動を末永く続け、定着化していくために、台湾で日本語を勉強している若い世代の方にもっと参加をしてもらいたいという願いがあります。グループの活動などを掲載したホームページを復活させるなどして、次世代への呼びかけに力を入れて行きたいと考えています。

「東部地区日本語教育研修会」初年度活動報告

佐藤貴仁（台北事務所日本語専門家）

1. 同研修会開設の経緯と概要

これまで日本語センターでは、台湾の日本語教育に対する総合的な支援を行うことを目的に、様々な事業を展開してきました。その主たるものの一つが、日本語教師を対象とした研修会事業であり、これまで数多くの研修会を行ってきました。しかし、その主な会場は、人口が多い地域、即ち必然的に教師・学習者が多い、台湾西部の台北・台中・高雄といった都市部に偏っていたというのが現状でした。

そこで2008年度より、これまで支援の手がなかなか届かなかった台湾東部の花蓮を会場に、同地域の日本語教師の支援を目的とした「東部地区日本語教育研修会」を新たに立ち上げました。内容は教育実践を前提とした教室活動や指導法とし、同一参加者の参加を前提に、同一地域・会場で継続して行う「連続性のある研修」を企画しました。

この「連続性のある研修」とは、一回完結型の研修会ではなく、参加者が研修で得たものを実際の授業に取り入れ実践し、その結果や感想を次回の研修会で報告してもらい、参加者同士がその内容を共有し合うところまでを含めたものです。また、地域の人口から考えて、これまでの他地域で行われた研修会と比較すると、参加者の人数が限定されるという予測から、一方的に講義を聞くスタイルではなく、参加者が皆同等の立場で意見を交換したり、お互いの問題点を共有したりできる場の形成を考えました。参加者の主体性をより重視したこのような形式が、大都市ではない花蓮という場所の地域性が生かせると判断したからです。これにより、地域の教師間ネットワーク作りにも貢献することが可能であると考えました。以下が、想定した理想的な研修の流れです。

研修（教室活動例） → 授業実践 → 報告（共有と振り返り）

2. 今年度の活動内容と報告

上段1. に記したコンセプトのもと、2008年度は以下のテーマ（括弧は開催月）で研修会を行いました。

- 第1回「教えること、学ぶこと、そのふり返し」（6月）
- 第2回「気持ちを伝え合う学習活動」（7月）
- 第3回「コミュニケーション能力を育てる教室活動」（10月）
- 第4回「ゲームを取り入れた教室活動」（1月）

第1回目は足慣らしの意味を込めて、参加した教師が抱えている現状の問題点を話し合ったり、自身の教授観や学習観を客観的に認識した上で、各自の考え方を参加者間で共有したりする活動を行いました。具体的な指導以前に、自らのビリーフを確認することも大切な作業だと感じたからです。この回は大学生の参加者も多く、教師同士のみならず、学生の視点から教師に対する意見を聞くこともできました。最後に、参加者同士で話し合った末、次回のテーマを設定しました。

第2回目は「ポスターセッションを活用した教室活動」について、その理論的な説明から、授業での活動例に至る

までを紹介した後、参加者が実際に活動をし、発表するというワークショップ形式で研修を行いました。また、今回の研修内容を自らの授業で試みた上で、その実践報告をする発表者を決め、次回の研修会で発表してもらうことになりました。

第3回目の研修会前半では、前回決めた発表者3名が実践報告を行いました。報告は口頭のみならず、発表者各人が実際の授業風景を撮影したものを上映しながら行われました。成功例だけでなく、上手くいかなかった例も取り上げ、その原因について言及した報告や活動について学習者にアンケートを行い、その結果や意見・感想を紹介した報告など意欲的な内容となりました。また、この発表に基づき、参加者同士で討論を行い、報告された実際の授業についての意見を述べ合いました。この共有が、発表者に対しては効果的なフィードバックとなり、参加者にとっては自分の授業の参考になるものだとすれば、ここに同研修会の一つの理想形が具現化されたこととなります。

研修会の後半は、「コミュニケーション能力を育てる教室活動」と題し、教室活動における指導例として、「インタビュー活動」を取り上げました。前回同様、参加者の中から発表者を募り、次回の研修会で実践報告を行うことになりました。

第4回目も第3回と同様、前半が前回参加者2名からの実践報告、後半が指導例の研修という流れになりました。実践報告は、活動の成果だけではなく反省点についても実例を挙げて取り上げ、その原因について分析した報告と、活動後の自分自身の気づきを報告したもので、共に教師自身の内省に関わる発表となりました。この発表を基に、前回同様、話し合い後に意見交換をし、互いの意見を共有しました。

後半は「ゲームを取り入れた教室活動」というテーマで研修を行いました。これを以て、1年目の同研修会はひとまず幕を閉じたので、残念ながら、この教室活動の実践報告はありません。しかし、もし参加者の誰かが実践してくれているとすれば、これほど嬉しいことはありません。

3. まとめ

同研修会のために、他地域からわざわざ足を運んでくださった参加者が毎回いたことなど、予想外の嬉しい出来事もありましたが、手探りで進めてきた分、反省点も多々あります。それは、参加者の主体性を重視したいと考えながらも、研修会を形にしなければならない立場から、道筋をつけることが押しつけになっているのではないかという思いや、常に意見を汲み取りながら研修の内容を考えるまでに至らなかったことなどです。今後も、これまで関わってくださった全ての、そして今年度新たに関わるであろう皆さんと共に、同研修会のよりよい在り方を考えていきたいと思っています。尚、活動報告の詳細については当センターHPをご覧ください。

【ホームページURL】

http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/Top

交流協会からのお知らせ

本ページでは、当協会の日本語教育関連事業に関し、新年度より公開された3つの取り組みについてご報告いたします。

研修会の改編について

日本語センターでは、現職の日本語教師及び日本語教師を目指される方々への支援を目的に教育部国際文教處と共催のもと研修会や講演会などを行って参りました。これまでの研修会内容を振り返り、日本語センター開設当初に定められた研修会のコンセプトも各教育機関や日本語教師、学習者の変化に伴い軌道修正する必要があると考え、以下のように研修会の枠組みを見直すことといたしました。

変更点1. 研修会名称

台北と高雄の両事務所で開催されている各研修会の名称を統一し、「日本語教育夏期・冬期研修会」・「中等教育機関日本語教師研修会」・「日本語教育研修会」・「東部地区日本語教育研修会」の4つの研修会を開催します。

変更点2. 研修会の対象者と内容

「中等教育機関日本語教師研修会」は、名称通り中等教育機関で日本語を教える先生方のみを対象とし、教授技術向上と教師間のネットワーク作りを目的として行います。また、「日本語教育研修会」は参加対象者の隔てなく、日本語・日本語教育に加え、従来から要望の高い日本の文化や歴史などもテーマとして取り扱います。

変更点3. 開催地域

どの研修会も可能な限り台北・高雄の両地域での開催を基本とし、必要に応じてその他の地域でも行います。

上記のように、これまで以上に参加者の利便性を追及し、明確な特色を打ち出した研修会作りを努めて参ります。なお、研修会に関するご要望等は随時受け付けておりますので、お気軽にご意見ください(nihongo@mail.japan-taipei.org.tw)。

「日本語専門家派遣事業」について

交流協会に所属する日本語専門家が皆様の教育機関へ出向き、集中講義・研修会・ワークショップ・講演会等を行う専門家派遣事業を開始いたしました。

公募制により日本語専門家を台湾全土に派遣することで、教師数の不足や日本語教育に関する情報不足の改善の一助とし、また広範囲の教育機関とのつながりを築くことを目指しております。各専門家の専門分野や実施可能な科目、公募に関する詳細事項は当センターホームページにて掲載中です。

日台青年交流ウェブサイト(Match-Match Net)の開設について

日本と台湾の青少年交流のプラットフォームを目指したコミュニティサイトMatch-Match Net(マッチ-マッチネット)を新たに開設いたしました。このサイトは、「日本のアニメなどに関心を持つ台湾の若者が多いことは良く知られているが、両国の青少年交流は思いのほか限られたものにすぎない(文化室馬場室長談)」との思いから、より活発な青少年交流の促進を目的に計画されました。

下図は本サイトのロゴマークとトップページのイメージです。ロゴマークは台湾と日本がお互いに手と手を携えている姿を表しています(他にもどんな意味があるのか、皆さん考えてみてください)。また、各ページのデザインには、富士山、芸者、桜といったいわゆる紋切り型のイメージを極力押さえ、青年らしい「活力」「暖かみ」「かわいさ」を前面に打ち出すデザインが採用されています。



日台青年交流ウェブサイト(Match-Match Net)トップページ
<http://www.jt-match.org.tw/>

内容面について、当協会の青少年交流プログラムの広報や日本の最新情報(旅行、留学、ファッション、音楽等)の他に、高校生、大学生、大学院生、青年社会人の4つの窓口からなる、各層に応じたより実用的な情報収集が可能なコミュニティサイトが設けられています。また会員同士が自由に交流を図れる「交流区」では、言葉の障害を軽減するよう自動翻訳機能を取り付けるなどの工夫が施される予定です。

ユーザーの皆様が情報を閲覧・掲載するだけでなく、サイト上から沸きあがった交流会の開催等、実際の交流にまで繋がるようなサイト運営を目指して参ります。

目次

- 1~2 ページ 台湾日本語教育情報源
「台湾の普通高校における第二外国語としての日本語教育の取り組み」
- 3 ページ 日本語・日本語教育のキーワード
「相手と状況にあわせた会話能力の養成」
- 4 ページ 第3回インタビュー
「張文芳氏(友愛グループ)」
- 5 ページ 専門家記事
「東部地区日本語教育研修会」初年度活動報告
- 6 ページ 交流協会からのお知らせ